

都市化が進んだとはいえ、福生にはまだまだたくさんの自然がのこされています。
ゆたかな自然のなかで、人間性の回復と連帯をめざした“ふるさと”づくりが、市民の間にひろがっています。

福生のロマン、 夏を彩る七夕と源氏ボタル。

ハイライトは“ミス七夕”コンテスト

昭和26年、商業振興対策の一環として行われた“七夕まつり”。それに、さらに花を添えようと生まれたのが、“ミス七夕”コンテストなのです。

例年8月7日を中心に催される“七夕まつり”のオープニングは福生音頭。このパレードには2,000人も市民がぐりだします。クライマックスを迎えたところで、恒例の“ミス七夕”コンテストが行われます。



ホタル公園

この“ミス七夕”コンテストがスタートしたのは昭和50年。第1回目の“ミス七夕”応募者は30人でした。その後も、毎年平均15~20人の応募者がありますが、53年には、それまでの“ミス福生”を“ミス七夕”に名称変更、例年市民のあいだで好評をばくしています。

都下では数少ない“ホタルの名所”

初夏の夜空に飛びかうホタルは、その昔どこでも見られたものです。しかし、農業や都市化にともなう自然破壊によって、全国的にも減少の一途をたどり、幻の虫となりつつありますが、その夢幻的な光景を記憶のポケットにそっとしまいでない人はいないでしょう。

福生は、都下では数少ない“ホタルの名所”。夏がやってくる、涼夏を求め、ホタル公園を訪れるたくさんの親子づれを見かけます。

このホタル公園の一角で、黙々とホタルの養殖の研究に取り組むグループがあります。福生源氏ボタル養殖研究会（会員約15人）です。当初、玉川上水の幸楽園あたりに自然発生するホタルの保護にあたっていましたが、このめぐまれた自然環境をいつまでも保護するにはホタルの養殖を、と集まってできたグループです。

そんな会員がいま一番悩んでいるのは、後継者問題。若い人たちの協力で、この詩情ゆたかな自然の営みを守っていききたいものです。

